



士民集會石友達り
子京の書
付

3166



114
A 4541



津田仙圃誠恐誠惶奉申上矣

大政涉維新之為在凡百之師製度皆先表
上為私心以來固陋頑僻之舊習を一洗し開明
光大之化域を擴進する成度涉遠きより廣く
言論をさる南偏く譽美をさる採り後獨り
皇國之文化をさる望む可也存心は實に東洋之
昌運をさる謀、法美私共如き、草莽之賤民に
即ち遠く存感佩候令微事細りなとも南明
之師趣意をさる適々多し、忌憚り願ふは建言
之限に國恩をさる報度鄙哀務止思意趣

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

奉陳編の折七固陋開明之利害得失ハ三長之童子とて之能く辨別傳其を別後在中上ノ所て之歩有得共固陋之舊習を洗ハ開明之化域進ハ事業之実効を至ハカ悲ナク地信ニ至ハ中がと存ハ尤も痛堂とてハ疾ハ此得失を為謀ハ音集流ノ院を設けて公論を為向待紹ノ局を開以テ賢才を七の拾文武ノ官者各其人を得者予我ノ意ハ佛政律上ヲ取テハ聊ハ清廟典不リハ互ハ相共皇國ニ及ハ古ナク士民ノ別嚴者ハ亦幸尊

昇隔能少一性ノ空懐ノ美を而ハハ有子ノ文際ニ及ニ至美賤を論して性未と限リクニ是を以思を同ク友誼を結ハハ及以テ是ハ有偶ハ門國ニ傳伸中傳考ノ人ありて草津ニ送受隠良ニ士ト下文ニ後ノ得を衆人側目シ其異ヲ驚キ社説少多ノ至ホ有ク可謂子術文社説善シ益友多美類然也隔ハ此一美也固陋之舊習テ了右佛之洗不クハ奉ハ内ハ庶量上ノ力也如何振開明ノ佛教之志を努力トシハ奉ハハハ千実効半ニ至ハ十百を宛然今亦一百万ノ士民

一、面堤耳誨と遊つ海と難と本と官と方々
不考と之を予と示して此舊習を以て洗つ一策
歩及後法を採仕處有る。其法亦三人者
化育の一途と爲るに多少の利害ありて其心
痛心を其右自諒考供至近來西洋各國を
以てハ右法は有恒之文明進歩を主とし以てハ
ソラブと申集會不を有建其國之皇子王孫中
人之心を憐れ方この社恩を主筆と法中外の
士民を昇進職に別を論せ凡有者ハ夜の暗
りの社恩に如かり申す集會以て世道人心
好悪より多料藝樹の教明物產高格同

望等と申す者ハ耳目と觸り多心思感一ハ
其ハ互に付論を以て受授を専ら仕結局人智
を南に譽美の操り隱々國益を得るに爲る趣意
ハ其法ハ一律譽美を降るに既ハ
大改之由綱領を撰共右に別ハ鋭い
皇國を以て士民之集會不有建ハ庶幸ハ以
て樂知の國人長治地中ちんて頗る手廣ら官
右半程借更事ハ右ハ集會不仕を規則
以て西洋の例に依り中外の書籍及び新聞
本邦之信伸士民之差別を論せ凡一技藝

長き初のを草りて又社内を為加時此交
集會の上者々を長を以て互に討論更
換して即ち人智を南に蒙美を拵了臨
諸國を益と大成する西洋各國の伯仲して其
一有は吾々の和共と不肖の細民を其開拓
皇國の文化を有希の外無他心有り右此の
内一其修文の文を集會する及建する其文
及年中夜大に利害得失を賢察する其法
容に能く其尤も其法採用する其之に右
集會の規則要領を都て西洋の製を折

衰はる調書西可有中其世より此は
予留之州之文社誘善之益友を為百年好
々々の懐一固陋頑僻之舊習を一洗一開明
究大に化城を擴進する其実効を其其
佛維新之法存徳は先表之法餘詳其節
之約其民の所望して其其限
其存其其其盛運に力有り邊進行す其志
其不願罰衰其越減其誠惶其其以上

廿月

地方官受屬
津田仙酒

